
『heartのjoker』

黒澤 蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「heartのjoker」

【NZコード】

N3915F

【作者名】

黒澤 蝶

【あらすじ】

転校生、天野時雨と4人の野獣からなる学園コメディー

第1話「転校生」

「マジで？」

200×年 4月

高校3年になつた俺達は教室にいた

普通の学校、普通のクラス、その中の普通のグループ

何気なく毎日は過ぎていく

平和だと、俺は思つ

しかし、平和は長くは続かない、ちょっとした事でいつも簡単に崩れは崩れた

あるいは、始まつた

今日から、3年といつ事で俺は三階教室に向かつた、一年の時は何故か四階だったので、楽になつた

まあ別に階段の1つや2つ増えた所で変わりはせんが…

「よー、おはよー」

教室に入ると、竜貴が俺を待っていた、俺より早くに竜貴が教室にいるのは珍しい

「んおーはえーな竜貴…」

俺は大袈裟に驚いて言った

「まあ、たまにはね、それより聞いた?」

「え? 何を?」

「実は今日…」

竜貴は咳払いをして言った

「実は今日も、転校生が来るらしいんだ」

「マジで？」

「先生に聞いたんだ、女だつて」

竜貴は少し興奮気味に話した

「女かー、まあアコ先生より魅力があるとは思えんが…」

俺は言った、アコ先生とは、一年の頃の担任で、三年になつても俺達のクラスの担任になるらしい

ぶつちやけ竜貴達と同じクラスになるよりアコ先生が担任になつた時の方が嬉しかつた

いや、竜貴達とも一緒にクラスになれて嬉しかつたけどもね

すると教室のドアがガラリと音をたてて開いた

シ一まではまだ時間があるので先生では無い

「おー、今日転校生がくるんだつて？」
挨拶も無しにそう言つたのは昭一郎だ

金髪に薄い眉、一見すると不良に見えるが、話してみるといい奴だ

「ううい、可愛いのかな？」

俺は昭一郎に言った

「可愛いにかつたら、俺の色氣で落としてやるぜ」

昭一郎は顎に手を当てて言った

「はーはー」

竜貴は呆れた顔で言った

「ナニにえ、卓也は？ もうすぐ始まるぜ？」

「遅刻だーーー！」

勢い良く階段を駆け上がる、彼は前田卓也、寝坊をした彼は朝食も取らずに教室へ急いでいた

「あ、あの？」

突如女子から声がかかる

「あー？」

卓也は急いでいたので言葉が雑になつた

「いや、急いでるなり……こいです

と女の子は言った

「やべ、『めんな』」卓也はそのまま急いで階段を駆け上がった
女の子はしづらぐ一瞬をうつりこっていた

「ギリギリセーフ！！」

教室のドアを勢い良く開けて卓也は言った

「アウトよ、前田君？」

アユ先生が二三歩しながら言った

「進級初日に遅刻とはい一度胸ね」

「すみませんでした！」卓也は深々と頭を下げた

「まあ、いいわ早く席に座つて…」

とアユ先生は言った

「先生、転校生は～？」と俺は聞いた

「そうそう、今日転校生の女の子が来ます」

アユ先生がそう言つと教室は賑わつた

「はい！静かにして！その転校生ですが…何故か教室に来るまでにはぐれてしまつたので…ち、ちょっと待つて！先生探してくるから…」

アユ先生は教室を出た

「転校生…？ひょっとして…」

卓也は言った

「ん、どうしたのかな？卓也君」

俺は聞いた、ちなみに普段は君は付けない

「さつき、一階で見慣れない女の子に会つたけど、その子かな？転校生つて」

「可愛いかったか？」

突然昭一郎が出てきて言った

「いや、全然見てなくて…」

「ちつ役に立たねーな、前田のクセにー」

昭一郎は言った

「それ酷いわー」昭一郎君…

卓也は言った、いつもの掛け合いで、どうやら役に立たないと言われた事は気にしていないらしい

「なあ、涼馬？」

竜貴は口を開いた

「ん？」

「俺達も探しに行こーぜー」アユ先生に任せたら一時間目終わっち

まつ……

「ま、そうだな……行くか……」

俺はわざとダルそうに席を立つた

「どこ行くの？涼馬、竜貴？」

昭一郎は聞いた

「転校生を探しにな……」

俺はダルそうに答えた

「おっ俺達も行くぜ、なあ卓也？」

昭一郎は卓也を向いた言つた

「行つてらっしゃーい……」

卓也は手を振つた

しかし、強引に昭一郎に引っ張られ、結局4人全員で転校生を探す事にした

第2話「すれ違い」

転校生が来るらしい

しかし、転校生は先生と教室に来る途中ではぐれたらしい

先生も気づけよ…

まあ、そんな訳で先生だけに任せるのは不安だ

故に俺達も転校生を探す事にした

「卓也隊員！特徴は？」

と俺は聞いた、転校生に会つたのは卓也一人なので、転校生を見つけ出したとしても、卓也しかわからない

まあ、今は授業中 一時間目はホームルームに今日は設定されているので、教室にいなるのは俺達と転校生くらいだが…

「ん~…わからないでありますー隊員ー」

「豚めーーー！」

俺は卓也に平手打ちした

「ぶつ！」

卓也はの頬から パンッと大きな音がして、卓也は崩れ落ちた

大体、卓也はこんな扱いを受ける、相手は主に昭一郎だ

「何階で会つたのかも覚えてないのか？」

「確か一階だった」

「よし！行くぜ……」

一階

転校生の女の子は二年の教室を探していた

「あれ……三年の教室つて一階じゃ無かつたっけ……一階かなあ」

女の子は一階へ

「うっしゃあ！一階に着いたぞ！！」

昭一郎が騒ぐ、頼むから静かにしてくれ、他は授業中なんだ…

「一階はやけに空き教室多いから手分けして探すぞ！」

竜貴は言つた、空き教室にいつまでもいると思うつか？

それより転校生も転校生だ、他の学年の奴らに教室の場所聞けばい

いの」「…

「よし！俺は一階を探す！！俺と組みたい人！」
と俺は言つ

「…………」

誰も挙げず、皆は一階を探す

「あれ、無視？お笑いの基本？」

仕方なく俺は竜貴を引っ張り一階へ

一階

「あ、天野さん」

アユ先生は転校生の天野を見つけた

「あ、先生…どこにいたんですか？」
天野は聞いた

「三年の教室は二階よ？行きましょうか」

「はーい」

天野と先生は二階へ

「竜貴君、竜貴君…」俺は竜貴に呼びかける

「何かね？涼馬君…」

「私は今、死を覚悟している…」

「奇遇だな…拙者もでいざれぬよ…」

俺と竜貴は勢い良く階段を飛び降り…

跳びすぎた…

俺と竜貴の田の前に立つ

見回りの先生が

「ああああああ！－！」俺達は叫ぶ

先生

「（。 。 ）あああああ－－－－－」

ドオオオン

「さりばだ……先生……」

俺達は倒れている先生にそつまつて、転校生を探した

二階

「いねーな

昭一郎は空き教室を探している

空き教室にいるわけないが…

転校生を探してもう15分、さすがにもう教室にいるだらうと車せ
達は二階の最後の空き教室に手をかけた

「これが最後だ…」昭一郎は言った

「よし、行くぞ…」

ガララ

空き教室を開けた

そこには

見てはいけないものが…

「 x @& a m p ; ¥ # \$? 」

冒険の書1は消えてしまった

冒険の書2は消えてしまった

冒険の書3は消えてしまった

卓也達は記憶を流れられ、二階の教室にいた

「あれ……俺達はこいつたい……」

そこには、転校生の紹介がされていた

「今日からこの学校に通う事になりました、天野 時雨 ですか？」

パチパチパチパチ

教室から拍手がなった

「じゃあ、適当に空いてる席に座つて、アユ先生は言った

「えっと……」

空いてる席 空いてる席

一つ空いてるが……

「あ、涼馬の席……」

「いいでいいか

卓也はさつまおうとしたが…

転校生は既に座つてしまつていた

一階

「いな
いな
あ…」

俺と竜貴は転校生を探し続けていた

第3話「七不思議」

学校の七不思議…

一つ、音楽室のピアノは夜になると勝手に鳴りだす…

二つ、四階の空き教室のロッカー…それは人食いロッカーである…

三つ、美術室の鏡は異世界と繋がっている…

四つ、理科室の人体模型は夜中になると学校の見回りをはじめる…

いつ…「いやあああああ…！」

転校生 天野 時雨の声だ…

天野が転校生してきてから四日、席が近い事もあって俺達四人とはなかなか仲がいい

その前に自己紹介をしておこう

まずは、木下 竜貴から

木下 竜貴

通称 そよ風の竜貴

その昔、暴風警報が発令されても学校にやつて来た事からこのあだ名がつけられた

伊藤 昭一郎

通称 腰痛の昭一郎

高三で腰痛に苦しめられている事からつけられたあだ名だ

前田 卓也

通称 ハニカミ卓也

不良五人につづいても次の日ハニカミ続けた事からつけられたあだ名

そしてこの俺、佐藤 涼馬

通称 花壇の涼馬

四階から転落し、花壇にあつた花に助けられてから毎日花壇の花に水をやつている事からつけられたあだ名だ…

あれは痛かった…

あとは天野か…

天野は青い髪でなかなか明るく可愛い奴だ

身長160センチ

体重 44キロ

バスト…ぐはつ 殴られた

とゆう訳で自己紹介終了

次回もお楽しみに

「もーーー? これからお化けとか倒すんじゃねーのー?」

卓也からのシシ「ミ」が帰ってきた

血口羅刹にせりのまんじ

面倒臭くなつてきた……

「これ以上文字も続かんし俺は帰るよ」

「いや、わけわかんねーか」

竜貴も俺をつっこむ

今日は俺はボケらしないな、よしー。といふとんボケてやるぜー。

「いや、今日のお話は七不思議だし、俺が出る番ぢやないかなーって思つて…」

「ぢやって何だ?」

竜貴は俺をつっこむ

「使い方が違うのぢやないかー。」

昭一郎は言った

「オメーもちづーんだよー。ついついこんじまつたー。昭一郎の思

うツボだ!」

「それより今日の話に戻つたら?」

天野は言つた、さうだった忘れてた

彼女がいなければとんでもない方向に話が進むところだった

「そうだ、そうだ…天野が叫んだところまで行つたんだった…よしー。叫べ!」

天野は叫んだ

今日俺達は七不思議の話で盛り上がつていた

天野はお化けは苦手らしいな……

「ねえ、涼馬ビックリマークの数、あれで合ってたかしら?」

「いや知らねーよ！ なんだてめーらー!? 今日は俺がボケじやねえの? 」の調子でボケられてみろ! 嫁に行けなくなるよ! 間違いく!」

俺は言った

「お前女ぢやないから」

竜貴は言つた

「だからー、ぢやつて俺が最初に使つたんぢやねえの！？ てんのよみんなポンポンポンポン！ 使用料を取りたいよー！」

「まあまあ、とにかく夜にならん事には話は始まらん！」

卓也は言った

その通りだ、お化けと言えば夜

俺達は夜に学校で待ち合わせる事にした

夜中の十一時、学校

俺は一人待ちぼうける…

「こないなあ

夜の風が身にしみた

第4話「異世界の鏡」（前書き）

……ふつ

第4話「異世界の鏡」

「遅ひ……」

俺は遅れてきた竜貴達四人に言った

「いやすまん、 実はなかなかアニメが面白くて……」

卓也は言った

「てめええ！ アニメ！？ 感じる事多き年頃の僕を四十九分ほど放置してアニメ？」

「俺もアニメを見ていてな……」

竜貴は言った

「何なんだよ！ 何のアニメなんだよ タイトルを知りたいよ！… 激しくつっこむ、寒さを忘れるほどに

「今流行りのアニメ、中古 アベシの空腹を……な

「何だそのタイトルは！？ 製作側のやる気の無さが垣間見えるよ！」

「俺はレスラー 消臭 力の試合を見ていてな、ビデオにも撮つたぞ！」

昭一郎は言った

「お前もテレビ観てたのかああ！ ていうか録画したならいいじゃん！ 来ようよ学校に！」

「私は虹色の河童に追いかけられて…」

天野 時雨は言った

「大嘘言つてんじゃねええ！！ 何！？君は、河童？ 虹色の？もはや学校の七不思議より凄いじゃん！探しに行こうよ今から！」

俺は全てにつっこむ

そろそろ疲れてきたので話を進める

学校の七不思議を解き明かそうと俺達は夜の学校に忍び込んだ

一階

「まずは一階からだな…… 一階に何かあるかい？」

竜貴は天野に聞いた、天野はみんなから集めた七不思議の噂についてまとめた紙を見た

「ん……と、一階は……あつ一、異世界の鏡がある美術室は一階よー。」

「よし！ 行いづー！」

卑世は叫つた

異世界……なんだそりや？ と思しながらも少し興味は出でた

美術室

「これが美術室か……あれ？」

「どひした？ 昭一郎」

俺は昭一郎に聞いた

「灯りがつかないんだけど……」

…………嘘だろ？

「いや、昭一郎君悪ふざけはいけないよー。ちゃんと懷中電灯確認したからつかない筈が無いよー。有り得ないよー。」

「こや、だつてマジでつかねーもん！ やつてみ？」

昭一郎から懐中電灯を渡され、俺はスイッチをつける

カチッ カチッ カチッ

……

……つかねえ

「あつーーでも大丈夫よ！ 私もライト持ってきたから

うおおーーマジで焦ってきた！あれ？

何だこれマジでつかねーぞ？

「あつーーでも大丈夫よ！ 私もライト持ってきたから
天野はライトで部屋を照らす

「なら、まずは鏡を調べようか」

竜貴はそう言つとライトを天野から受け取り、鏡を照らした

鏡はどこも変わりは無い……まあ暗い部屋で鏡だけをライトで照らしたら相当に怖いが……

「んつ？鏡に映つてゐるあの絵…」

卓也は鏡を指差して言つた

「ビ、ビ、ビ…」

俺は冷や汗をかきながら卓也を見た

「鏡に映つてゐるあの絵……」の部屋に無いんでナビ…」
卓也は言つた

俺達は恐る恐る振り返る

…無い

…無い

…無い

「まるまる……」

俺達は再び鏡に振り返つた

すると鏡の先には絵を描いている学生の姿が！

俺達は一目散に美術室を出た

自己プロデュースもへつたくれも無い

大急ぎで俺達は学校の門にたどり着いた

「何なんだ！？」

卓やは慌てて聞いた

天野も言う、しゃべり方にいつもの落ち着きが無い

無理も無いが…

学校の門

やたらと高い学校の門に俺達はたどり着いた

「早く開けてえ！」

天野は門を開くように言つ

「待て！ 俺…閉めてねえよ…」

俺は確かに門をわざと開け放しにした
すぐに逃げ出すためだ

「だ、誰かが氣づいて閉めたんだきっと… ははは…早く出ようぜ
？」

昭一郎も焦っている

門を開けて学校を出た俺達は二十四時間営業のファミリーレストランに入つた

とにかく明るい所に行きたかつたからだ

「……で！ あれは何かね？」

俺は皆に聞いた

「知るわけないだろー！」

竜貴は言った

「異世界の…先？」

天野は言った

「ま、まさか…」

卓也はそう言つたが、確かに部屋には無い物が映つていた

「『』注文はお決まりですかー？」

やけに明るい店員が俺達に注文を聞きたて来た

「あついえ…まだ…」

俺は言つた

「あー！ お姉さんの格好 中宮 アベシの空腹のアベシの格好そ
つくりだ！」

卓也は言つた

「恥ずかしいから止めてくれ…卓也君 すみません店員さん、また

後で…」

竜貴は言つた

「はーい！ かしこまりつ すみませんかしこまつましたーー」

……かんだな

「そつのかみ方もそつくりだつたな～」

卓也はお姉さんを見て言つた

「……ちよつと氣になつたんだが…」のレストラン、アベシが働いてるレストランにそつくりじゃないか？」

竜貴は言つた

俺達は一日散にこのレストランに駆け込んだので、「」が何町のレストランなのか知らないが、竜貴に言わせるとそつくりここ

「そつといえ、こんなシーン見た」とあるぞ？」

卓也は言つた

「……ちなみにどんなシーン？」

天野は聞いた

「第四話の「ドキッ アベシのアルバイト」の話か、アベシのバイトでいきなり強盗が入ってきて…」

卓也はペラペラと説明を始める

「……で！ 謎の男女五人が強盗をぶつ倒して、何も名乗らすに去つて行くつていづ…」

「…………」

すると突然レストランのドアが強引に開いた

「コルアアア！…てめえ等！静かにしろお！ そしてそこの店員！ 金をだせえ！」

強盗がやつて来た
数は一人

「…………」

「おほつ！原作そつくりだ！」

卓也は言った

「あの～これくらいでいいですか？」

「てめえー「コルアアア！」んなんで足りると思つてんのか？てめえ
コルアアア！ 俺はなあ！結婚資金が欲しいんだよてめえコルアア
ア！ 何！？お前：五百円！？ 結婚資金五百円？ デートもでき

ねーじゃんーてめえ「ルアアアア！」

「あわわわ……」「あらり……」「せ、」「めんなさい……」

「ちゃんと謝れええ！ 見たことねえよ」「めんなさいでかむ奴！
もういい！ てめえは人質だ！ 店長を呼べええ！……」

「はう～店長～助けてくだわ～…助けて下さ～～

「かむなああ～～～

「…………」

「…………」

「おおつ～ますます原作にそつくりだ～このあと謎の五人が強盗を
倒すのだ！」

卓也は興奮気味に言つた

「天野さん、天野さん

俺は言つ

「言わなくてもわかるわよ…涼馬」

「あれ……だよな」

「あれね……」

「い、かげんにしろお店長コルアアアア！　俺はお前　この度は結婚資金が欲しいってんのに！　お前も五百円！？お前達一人の金銭感覚はどうなつてるワケ？」

「店長～」

アベシは言つた

「あああああ！…………！」

俺と天野と昭一郎は竜貴と卓也を引っ張り、走つた

「ん？　何だ！？　てめえら？　コルア…………」

「つるせええ…………！」　俺は強盗をリリアートで倒した

強盗は宙を舞い、一回転して地面に激突、気絶した

「あ、あのあなた達は…」
アベシは聞いた

「あああああああ…」

俺達は何も言わずにレストランを出て学校へ走った

「あ、あの…どうもありがとうございます…ああ…へやつ…かんだ…!」

学校

「良く見ると学校も違つてるな…」

昭一郎は言った

「美術室に行けば現実に戻れるはずだ…」

俺は言った

美術室

「よし！ 行くぞ！」

「せ〜の！」

俺達は鏡に突っ込んだ

ガシャアアアン

凄まじい音とともに鏡は割れた

番外編「アベシの空腹」

「中町 アベシの空腹」

「第1話 うほ アベシの早弁」

アベシ「は～い私はアベシ、高校受験に五回落ちて六年目でようやく合格したよ～ あと現在六百万円借金のある普通の女の子だよ」

アベシ「やあ～私は今一時間田の授業を受けてるといふだよ それにしてもお腹が空いたわ～」

謎の男「駄目だよアベシちゃん～ またお腹にお腹がすいて倒れちゃうよ」

アベシ「モグモグ……ん？」

謎の男「もう食つてる～！ 流石はアベシちゃんだ～僕が喋つてほんの数秒の間にこんなに……で「ホホー～食べちゃ駄目つて言つてるじゃないか」

アベシ「も～うるさいわね～！」の気持ち悪いネズミの顔をした
デカい男は 東安門 雪麿 その昔私がムシャクシャして描いた魔
法陣から出てきたの、そして私と一緒に高校に受かったわけ

アベシ「あ～あお弁当食べちゃったわ……ねえ雪麿、何か買つてき
なさいよ」

雪麿「いやだよ～自分で買いに行きなよ、アベシちゃんがこいつして
早弁する度に買い物行かされてたんじゃもう僕授業数が足りなくな
るじゃないかあ～！！！」

アベシ「しかたないわね～じゃあ雪麿のお弁当でいいわ、それよこ
しなさいよ」

雪麿「冗談じゃないよアベシちゃん～いいかい？アベシちゃんのお
弁当も僕のお弁当も今朝僕が早起きして作ったんだよ？それにア
ベシちゃんのお弁当は僕の倍～あー～！！！食つてね～～～～～～」

〔第一話 アラ アベシと痴漢〕

女性「きやあ～」の人痴漢です！

男性「ち、違う～僕じゃない」

アベシ「この電車は痴漢が多いわねー やつとー・雪麿アンタ少し離れなさいよー！」

雪麿「いや、僕じゃないよー アベシちゃんこれに向ーー? わの『』を見るのは何だ?」

アベシ「当たり前じゃない、日本の痴漢の一割はアナタでしょう?」

雪麿「ち、違うよー 冷静になつて考えてみなよー この東京だけでも一体どれくらいの人が電車に乗つてると思ってるんだよー 僕じゃないよー」

アベシ「気持ち悪いから私は女性専用車両に乗ることにするわ」

雪麿「お願いー 置いてかないでよアベシちゃん! 僕みたいな顔だけネズミのムキムキ男が一人でいたら完全に浮こちゃうじゃないかあーー!」

アベシ「しかたないわね、じゃあ今日だけは一緒に学校に行ってあげるわ

雪麿「あ、明日からは来てくれないんだね……もう死のうかな……」

ピッ

俺はテレビのスイッチを消した

「つまらねえ……」

第5話「移動」

「ここは、卓也の家。

いつもの奴らが、いつものよつに集まっていた。

「なあ…お前ら、何で用も無いのに家に集まるんだ?」

「この部屋の持ち主の卓也は言った。

「俺はお前の家のお菓子が目的だ」

高校一の糖分王、涼馬が言った。

「お菓子って…お前の前も俺の クランキー Wチヨコナツツを
食べたじやねーか!」

「あ、お菓子があるのこの棚?」

「あ、てめ… クランキー Wチヨコナツツが…」

卓也が言こさる前に、涼馬はクランキーをザクザクと食べ始めた。

「最後の一個だったのに… で? あの三人は?」

「俺はお前の家のアニメロ▽ロが観たくてね」

竜貴は言った。

「自分の家で観るわ！ 何故俺の家で観るー？」

「私は…………虹色の河童に追いかけて……」

「嘘をつくなああーー！ いてたまるかー虹色の河童なんぞ」

時雨の答えに対し、卓也は言った。

「で？」 昭一郎は？

「お前に……会いたくてな……」

「人の漫○画読みながら『ひひひ』じゃあないよな……。 ようつか、漫○画のカバーを外すの」

卓也は立ち上がって言った。

「よく聞け！ お前ら対した用も無いのに家に集まるな！ 迷惑な

んだよ！ … つて涼馬、カーペットで手を拭くな！ 龍貴もＤＶＤをバラバラに並べるな！ 昭一郎はカバーと漫画に分けるのを止めろー！」

「……ヤー！」

「ミケー 鳴くな！」

「これ、卓也の家の猫よ？」

「ち、つむせーな… 出でけばいいんだろ、出でけば

涼馬達は愚痴りながら卓也の家を出た。

「… つたぐ、やつと出でいったか…」

卓也はまつと胸をなぐ下ろし、ローブを手にとつてプレイヤーに入れた。

「やつぱりアニメは独りで観るに限るね」

しかし、次の日

「あのや……何で学校帰りに俺の家に寄るわけ?」

「早弁したから、お腹が空いてな……あつークランキー アイスナツツだ」

涼馬が冷蔵庫を開けて言った。そしてクランキーを食べた。

「勝手に冷蔵庫を開けるな!」

「——」

「//ケー・鳴くな!」

こんな調子で卓やは、毎日家にあがる涼馬達に迷惑していた。

そして、卓やは決意した。

深夜の学校の美術室

ここは、以前七不思議の時に来た場所だ。昼はなんともない場所

だが、夜になると異世界に行けるらしい。

「…俺は」の先にいる、アベシの家に…」

卓也は鏡の前に立つた。そして、助走をつけて飛び出した。

「行くんだああ！」

卓也は鏡に突っ込んだ。

ガツシャアアアン

鏡は割れた。しかし、移動は成功したらしい、何故なら美術室の物の配置が全然違っていたからだ。

「お…俺は…アベ…シの…家へ…」

血だらけの卓也は、這いつゝにして美術室を出た。

しかし、卓也は直後気絶した。予想以上に血を流し過ぎたためだ。

「あー、ノート忘れちゃったわー！ つたく雪磨の奴、私にノート見せてくれないんだもん！」

アベシが自分のノートを取りに学校を走っていた。

「全くう、夜の学校は怖いわ……何か出そつな雰囲気ね……ん？」

アベシは何かを踏んづけた。容赦もなく、全体重を乗せて。

「ぐえええ……」

氣絶していた卓也は叫んだ。

「さやあー、「」、「」めんなさいー」

「はつ！ 気を失つてた……ビ」の誰か知らんがありが……あー！ アベシ！」

卓也は体を起して言つた。

「えつ……何で私の名前を……あつ！ 強盗を倒した人！？」

続いてアベシが氣づいた。ビツやアベシは前の事を覚えていたようだ。

「「」のあいだはビツも」

アベシは、以前強盗から助けてもらつた事に礼を言つた。

「あつ、いえいえ……ところで何で学校に？」

卓也は聞いた。聞いた所で間違いに気づいた。何で学校にとは、アベシが聞く事であつて、卓也が聞く事ではない。

「いや、卓也の学校ではなく、アベシの学校なのだ。
鏡を通じて、卓也はここに来た。」

「私は、忘れたノートを取りに……あなたもこの生徒だったの？」

アベシは聞いた。卓也はこの生徒ではないが、何故いるのかと
質問されたら、回答に困ってしまった。仕方がなく卓也は嘘をつい
て乗り切る事にした。

「うん、俺もこの生徒なんだ、七不思議を解き明かそうとしてて
る……」

「ふーん、七不思議ねえ……手伝いましょうか？」

「えつ……ああ……お願ひ……します……」

（Hな事になつた……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3915f/>

「heartのjoker」

2010年11月27日20時19分発行